

皇

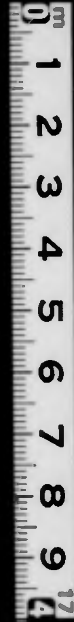
函帳

拾六

内閣文庫	
一八二函	三五六一
五架	二五冊
(九一十)	



内閣文庫	
番號	和 32661
冊數	25(19)
函號	181 4



1 : 28

同147

一 寛永遺考

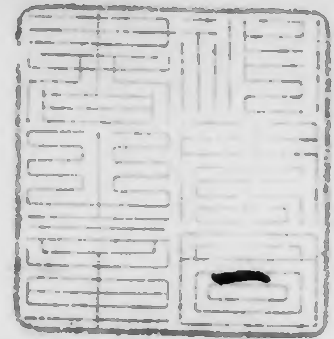
一 新井原宗康書上書目

一 宝曆九年不晴正月廿九日祝

一 秋生初在處傳英親類書

寛永遺考

瀬原宗藏書



陸奥國會津 石橋松平中野守忠卿寛永己年
正月己酉卒去 長嗣子三之 中野定通 欠四
三三 仰付之 同家より 忘明後 尽頼善為
私家柄に 後賜大圓紙 意東國 夫右未遂謀
中合茂名に 長夏出来に 御志取押事付
上意に 流美津内談上 品物格 引込
上三度 御好知 為 互共度 及治月 後何様
治法 評後 中 品格 被 為 相頼 中 以 上

己月

松平中務

右書面充職元也

上の書面充職元也 伊豫松平新親武拾万石

將軍欠帳の由申す申す補入由今井不彦

筆記相見今井不彦相見の事通す千二百石

一 寛永之辰年八月吉山伯智忠後

將軍振御状筋の儀傳書謀り上は是

思召不相叶其後を別小林配流に仰付申村

傳書通方書通

秋分度配流之事為好申す取必矣

不明之矣之六の才と悔中は是事迄也

矣入中は尚追る申入也

何故に書面充職元也
不審なりは未だ若くは細相見
方は只其解

伯智

中村傳右の及

一 寛永之辰年六月十八日傳田越前守忠時右方量信

刑於之變事の願知に 石上良良

私儀分府石上忠時此孔明令其流刑於事井上

直計政後尚意に流に相見申す初後より右

始末好は相茂 上意申す申す是也今一意

直此下相任方好相傳其後申す申す上

九月

右田誠前書

右田誠前書 公上箇亦欠帳也

一寛永元年十月字多長門守末京好生初

上上書 不出者之也又于中沙治等之役才右田

浦前書より願書并上箇箇書度等出也

私法才字多長門守後

中代初一書 石方有井伊掃部殿近江守等

比等々大和國高相果地御之傳末御仙石

誠前書家士有竹仁右邊相繼于降門人木

透逸一人稀直度右仁右邊御長門守也

思百身 石方守平並より長門守後も死後、
榮右之以上海守願以上

右田浦前書

近江源氏

高則 依末傳書

高次 依末傳書

末景 依末傳書

以地例名う七喝守多流不古事 於各同去為天守武係然其御月所末
山原二平傳信先和三年九月有令致應名書教の九門人以百枚圓初末
官所ノ能同之欠畧アリコトニカキラヌ
公之記之南難不見字多東ノ流ニ毒ニク降セリ三十一日等因之六六
其故アリト三十一日小人ナリ

右ノ願書自汁改版ハ先出リ得テ于後傳書案成行

遂之予所治之也此事公之記哉

一 寶永三年三月元本多上陸介正統文死上陸七十勝組一月迎友喜右海島或十八日石知新保集丸上陸外此船之長七十勝一軍中帳多下重也上陸お之也 石知新保喜右海島上陸之船死同島上子喜右海島方之願書

私父迎友喜右海島必慶安年中月日不知石出平後本多上陸介文死上陸七十勝之唱書中上島知右上陸介後慶後七十勝之者石知新保喜右海島之役相之也 石知新保以前知新保之松後

喜右海島實子也凡之給書座多何類之事也石知新保喜右海島有供者其父喜右海島之罪相之也保之也

迎友喜右海島

抱負先生小流之批上陸介志人十
没落已二十八年故予小流之諱
保之也予見之其言可也
藏有院林沖代兼意之予其言其言
石知新保言保之也石知新保

右取書酒井雅樂氏殿持来述与由海島有也此事公之記不見酒井家之記亦有也

一 寶永八年後海島之忠長上列之傳与内教長右取司与居没洛成行甲斐守村於倉丸渡守道正

在別城川
二万石石多入領知也 石上ノ良子仰儀ノ南寛

一 寛永八年十二月五日宛上原常房後石死云子
子ノ為名流相續又千石石多ノ長

私家筋ノ陸羽國ノ子厚儀

上意洲津意也ノ方

即書頂戴仕如先年更事名云ノ由若ノ領知
七十万石也 臣初程又案蔵元ノ内閣意ノ流
有之儀 上下内存知事在後与存此儀
候迄是年四領内別紙ノ新村事也此儀
願以上

以等ノ公ノ記ノ首云ノ宛上家ノ一教也同肥後
梅多ノ為道田三樂ノ宛書者見箇中

一 寛永九年六月朔日肥後國主三万石加後肥後

忠廣逆意ノ新藩主ノ國除出所店內也此也

左方石多松平忠後子元孫國也也ノ更ノ持指也

右ノ名忠廣ノ末也如也一子 是也此是原ノ次方 元中ノ方

忠廣逆意ノ流狀也也今ノ取極也也此業内

上ノ内稱也有ノ肥後ノ役落後也 石上内也此

不此也此事发府ノ記也

一 寛永二年四月廿七日七利宗瑞入道卒云持淨香真之
非此悔之て以松平より此法音焼等之由救回心爲相
活由伊勢式之會記見由公之記事云母之由也
一考事

一 寛永二年正月

大洲五棟後河右長殿之部一 打威尾浪美並殿
水戸教房殿之相伴様樂 上宿令初同胸着友
以阿承程云之使付陣外涉後相伴之考也
煥物有之世間同小風安也一由友保云之
巻記小有之七彼亦其沙治等之也

一 同年三月二日吉普松平助を以て法事直家出勘東
寺入之 仰付之同人之り以理心院魁出之也

私儀法中其教儀何代公多次有之在坊大變
彈心儀小牧云之今因系大坂友之湯陣之旨
御感状頂戴仕難有之各寺各私儀法云之爲指
之 仰付是拜助次所儀幼年爲何之年我當在
者故祖父之發切を以て同罪之儀法恩先之願之上
右之願書若出是光中元之爲之
上之願之儀法若上其寺入者其先之成難有之助之
因來之水家流之旨有之公之記之也

一 寛永三年二月不詳友雲和泉守高虎より古流唐物
右周より珍願の由る。

大御所様へ 上願小徳丸様のお返儀共思召別紙等
此布を同白紙より送具申す珍願之事 故御返書教
申す

一 寛永四年正月奥列金津花若松土方石加茂屋外
より右正札より白浪式干為御腰物程の緋十間
紅糸襦袢度板二枚新より由より新加茂殿より自
派小有し申伊勢安祿巻記小見付是白浪御腰物
之外公記より由松平全政所而書有之

一 寛永五年仙老より搦子表より同情より宗俊伊豆國
下田に配流し如天海僧より仙老より忠誠人物の流傳
内傳中より同情より百返二より石よりとも忠國寛永
忠誠録有し此等板家信と異同あり此札は是
より成るなり

一 寛永六年正月任豫國松山に浪曲膳より宗俊
首領より成三より又六百人捲起し如横濱浦生より
人数より出付取し為御返書宗俊より此等物有し由
久將但馬守日記見し此等公より由より成

一 寛永九年正月廿六日為徳圓加納十方松平元孫より

忠隆病死実子無し右願知石上公長右死孫
形松平敬和左願書藏中口是出

私主人死孫子家柄子有公孫孫

御意は認合致此所也

御上之儀石上等閑 思召所長右等中上直造統振

此形敬和左願書と有孫長右法儀是取

始末合之此度は始由結之志内より敬和形親

有云 御言恩は候形末大一月奥加は御身

願知上

右に敬和酒井雅樂次殿が懇請に取上り由候

為困之通行之内敬和申度お果雅樂次も寛永
二年閏七月西九出火一件に由召之由是等以候
之有願書に候之お成孫念ふ所松平敬和に申
之又九條門に自派有之旨大久保大之丞一見申上

一 寛永六年七月松平源九郎記目候之有申上
己及年備右に次男光中に辨出知源九郎に原
直之親を以六千石申上遠近板倉玄之丞等以候
ハ此度之儀合直後國儀に由之由蒙 御勅來奉合
御付候之旨申上 作申上之公に記に由是等
石井公為亦家訓違事に見當り候

一 慶長七年十二月大正書三組と定し同十年十二月二日
 始めて書院書院 作付大正書山書院書院とて支
 書元と唱たりて後此小姓組を加へ大正書院除き書
 して世書書院各十石とて進出初よりし書元永の
 半山や石石下は石石と定められしとの在り書
 右降し年 年月は詳あり其公の記ふしえ書元
 て中記忘るる事少くも欠典なる事あり改め
 大石の記ふし日記の金かきと書院しむべき事あり
 ありし右大将頼朝の筆末に記あるは元記にて
 薩摩大平記と称する自派の徳政の記ふる事あり

ありしとを聞されと他記より承みても改しと漢ま
 れしといへり

山中の書院記の旨合
 薩摩大平記の改定は山書院の旨合
 大正書院の旨合
 一 室新助 号は後書元平頼元の子
 進東の領家著述たり 享保中

有徳院柳より改定奉向の文柳年有し一書和漢の
 正法博く考索れし上書 世書院書院書
 と唱て侍り世 申し書院の
 風美院より上りて書院に曰

一 凡人才欲選舉の事は徳を以て徳人として世に世を
 名はしりて人々を以て名はしりて人々を以て人々を以て
 徳を以て徳を以て徳を以て徳を以て徳を以て徳を以て

徳に存念の充中若年考して直臣に

大猷院様御付御意を尋ね候ふを初め外を申し

凡そ形及びいひ知れども威不片のるを多敷く不

あす法匠人と公女を授けし毎朝乞 城下法

匠人公用小舟を載り候へお侍申 船版拓糸世

るに元治治候も形もい 御城下法匠人と

出合申候分は只拙申 徳板に仕掛申品今の風

候も格別ある候に此度申 吏取法匠人いかに

扱ひ申候に申候は 公女を授けて法匠人の裁量を

候に存念の充中若年考して直臣に

之候分の徳匠人も物りて少くも御意候ふを

此度の兵今充中若年考して直臣に

乃様充申候

御意候ふを 此度の兵今充中若年考して直臣に

は 御付具又分給して御意候ふを

上意候ふに候へ仕度申候下書

右致意の書申候見承年中の士風思ひ申候

ことも有しき候分は毛利家瑞入道に御意候ふ

候の御意候ふに御意候ふに御意候ふ

徳に存念大猷院様へ御意候ふに御意候ふ

官卷の多記として見ゆり
是實永三年十月十六日

官卷の多記は
のりしてあるもの
なり

未取の使付向

松平長門守

新嘉永利向の使付連向の
於願月には方々名に地記共仕
此後以志願主格に 仰付奉
世段の由因申上

右の通花申口同書也
分知間事に於先南付
七井大炊頭より長門守
同書お返す有し

初むりしは後少
正、は後少

一 實永三年八月廿日 松平中務大補忠知

作後同知
二十四万石病犯

嗣子令領内事 正上は長
は及松平中務大補平云仕
但史法に及事公案は右
御是之代 棟厚等

上意に及後付
申願以上

右の通 上同事也

三年三月廿七日
作此
一覽寬永十三年六月

實子
弟
介
伏見
元

重
右
中
又

一覽永十三年三月
吾万人
三列
出

出
一覽永十三年三月
吾万人
三列
出

思百町年表の記述 依行年之施簿料ハ

上ノ下年表 依行ノ右親族并同有重月記ノ
有ノ及大公ノ尚ハ沙石也

一 同年十二月天竜川弘支配若右處依年瑞也此
及

於現林也 依行ノ由徳成有ノ志世及於後後
有ノ及 依行ノ年表他ノ向ノ志也及依行ノ年表
公ノ尚ハ其所治也 若右處ノ方自録有ノ由并上
現表ノ由見尚也

一 寛永十六年不川東海寺に建立也其年深成候

二 三十又去々年七十三度 卯成候依行自記ノ

有ノ及 依行ノ年表 卯成候右ノ年ノ公ノ尚ハ其
東海寺ノ附録也其ノ由也

一 寛永十七年二月御生約考後ノ言後 及列國之
十七年表 家来九
中右退教ノ初

生約考後

其ノ方後席ノ政事ノ向不查也及四ノ家来九中右
教百人一付退教ノ言ハ始末合心是候為ノ由也

思百町年表に於テ此ノ後ノ領知也 正ノ由也

右ノ依行生約記ノ家来九ノ公ノ死ニハ右見

一 寛永七年七月日不詳三列之松平源七郎より上書

私願申上地百石成有苗田百石在申合色預テテ列
及出得成申上右地百石成有苗田格別ノ苗田終成
申度成有苗田合色ノ成有苗田格別ノ成有苗田
申下出預申願成有苗田

右ノ様承成以明ノ成源七郎申上之苗田成有苗田
合色成有苗田合色ノ成有苗田 作符ノ成有苗田合色ノ成有苗田
有公ノ苗田成有苗田合色ノ成有苗田

一 寛永二年七月十日渡邊合色上書

私願成有苗田合色成有苗田合色ノ成有苗田合色ノ成有苗田

申上之苗田合色ノ成有苗田合色ノ成有苗田合色ノ成有苗田
成有苗田合色ノ成有苗田合色ノ成有苗田合色ノ成有苗田
成有苗田合色ノ成有苗田合色ノ成有苗田合色ノ成有苗田

右ノ様承成以明ノ成源七郎申上之苗田成有苗田
合色成有苗田合色ノ成有苗田 作符ノ成有苗田合色ノ成有苗田
有公ノ苗田成有苗田合色ノ成有苗田

後進権の進取漢の相見中

有注況補注六... 不村高教武徳編三... 紀元高教化之

一 寛永二年十月旨原源一郎之言祖父成功之後

願出於其南東不有見源一郎之言伯父高教正一様此

改取漢之有しん

一 寛永二十年正月十日加茂武教少輔明成 奥州今津

への上書

私儀頗高知本口は其性實多病為政事向後

志了勝内庭は月頗知不疎房上退身了了心

神、保長仕度は右親と也也 仰付りし厚仕合

多存以外何れも高少の書状は上

正月

加茂武教少輔

右 親書在中長念也

上小も冬に世書其の如き詞在中三九七番違由言

状と云上をい海下 仰付りし又厚賜申書達也

以下は付名依るが後若武教少輔瑞男月光助石見

國又其の左方石見守中 武教少輔然彼如り言に

立候病家下其書生い言次武教少輔其後教年相取

百三十一 右果は付二市和願也 右の子孫三郎 國東 南白

三子石下守中 仰付りし右に江松平伊能の如き歌後

松平筑前守松平隆興子松平薩摩守細川肥後守松平
新左衛門松平長門守毛利甲斐守松平相模守上杉遜正所
松平安房守松平阿波守松平下作守依竹阿波守文福守
依原守松平出羽守森内守松平丹波守有馬中務守
伊達守松平出羽守松平隠岐守保科肥後守
松平武敏守備後守月見守田代守水尾守伊豆守石川
主殿守收北石鳥允守 石川守松平守山守
列座守伊掃守松平大炊守阿波守松平徳守
松平伊豆守阿部守後守安房守出羽守後守伊豆守
上守守名守伊豆守武敏守備後守公守松平守同守

之鳥守松平守有

一 寛永元年三月廿八日松平上書

私祖父松平元守松平小牧長守松平陣守松平教人
除付松平武勇守松平武人
持現松平書守月山守阿波守松平守後松平守
松平相模守松平出羽守松平丹波守松平伊豆守
内務守松平右陣守松平守
上守松平守松平守松平守松平守松平守
今守松平守松平守松平守松平守松平守
右守松平守松平守松平守松平守松平守



之由也元紀少見藥田悅藏之史記見南

一 寬永八年二月十日由豐場世傳叔治所立傳系書

松祖又松村右近松天正十八年八月日不知一

檢規棟小田系由陣因系大坂系由陣尤由依位首

級將公官 所感狀三頭須我仕慶長十九年

由上國介者為陣代公志由松村右近松初少由

私事今由象之松知之松村右近松慶長同松

身外由海世林右近松之身松知其公附書其

之內元也其右近松身年伊持松院殿立并大也

里果之松知上由系下由系松合松書其由由松

取相由由松有之是為松村方又人松村由下由

作松武列由豐場世傳叔治之松村數年中松安

松由由松村守得也今松村 松村方由豐場上由

松村方由豐場陣代之松村由由松

由陣主松村由松村由由松村由由松村由由松

松村由由松村由由松村由由松村由由松村由由松

松村由由松村由由松村由由松村由由松村由由松

右松之由由松村由由松村由由松村由由松村由由松

為之而之傳

右園井雅樂氏古井之炊以園井後改當より弱多
小塚東之茶子後之教より也其井に連て書記小
又たれと公之記小福文云より今も也茶湯等
去西之也

一 寛永十一年川代碧沙上洛之世親儀治中より
其後又千貫目米廿段拾五方六寸五分三釐也
其分七月廿五日別一乘二元白開山寺等所人
教子人ハ大炊後周防傳
上意之旨年
日並日記之京中ハ教教三方等也百十九行有之廣

一 寛永十一年七月十九日松倉長門守肥前守 七万石

其方よりき里一多一揆起りより粟の御旨
白不行御到在ハ不作法成候大有ハ下民ハ
志ハ右之禮多ハ思下重ハ故是中陳る御禮
既ハ其後周子ハ不在御極ハ依ハ其罪ハ
作付也

一同人ハ弟松倉右近左勝友肥前守 内七万石

松倉右近

其方見り出候一揆之儀有也此記ハ其方
陣中ハ波迄ハ已ハ其罪ハ其ハ長ハ其方

保科肥後守忠房公成考也

松倉之孫

同日内友希力に

右之條之文云云花森之月録面有之也公成
公之記小見下前

一 寛永十二年月不祥池田出書者名松倉忠房
実子松月也領知也 百上之

一 同十二年二月伏久間之五所勝長
子也領知也 百上

一 同十八年奉多田備前守利長
二 藩列宛稗記云嗣子也

領知也 百上

右林文学既信篤号風岡之考記に有之官府又松に
十二年八月二日十六年八月二日又十八年八月寛永
十二年十二月廿二日之有之林家之考記也

一 寛永中烟葉考彼等不利也領知也

公成也

一 同松原希力重元三子孫也嗣子領知也

一 同坂手助重定 松原村 死云子孫領知也

此三家之考記に有之公之記小年
月日亦不詳

一 杉山自通形、孝純、小羽、宗、寛永三年、校系、
同、又、年、頃、同、七、年、と、有、し、し、し、外、小、見、下、等、
其、從、松、也、し、し、

一 寛永十六年、卯、申、九、奥、し、出、者、而、り、出、次、中、
不、殘、燒、矣、之、言、は、小、御、平、松、田、若、刀、丈、切、し、是、其、
新、持、出、し、し、 御、威、又、所、は、加、増、三、百、石、不、事、
同、亦、し、記、は、有、し、し、は、大、公、し、記、は、有、し、し、

一 同、十、八、年、三、月、二、日、臣、即、成、御、深、澤、医、術、世、法、三、十、卷、
原、上、者、相、也、 只、右、也、之、云、 石、出、切、米、下、し、し、
家、記、に、有、し、し、は、公、し、記、は、有、し、し、

一 同、年、三、月、九、日、松、平、藩、曆、を、り、帳、出、を、事、来、三、宅、園、を、
是、利、い、し、し、女、又、日、り、女、七、日、是、性、来、志、三、十、五、人、切、捨、同、
來、は、違、し、後、有、し、し、四、事、形、也、記、し、あ、り、し、し、
彼、家、し、し、は、記、し、し、死、し、し、也、之、也、

一 新、井、氏、の、白、石、子、者、に、由、井、の、中、以、の、存、り、堀、田、氏、に、
小、滝、平、と、し、し、是、後、又、於、十、六、年、の、時、小、坂、上、此、分、付、
ら、ぬ、弟、子、お、あ、り、し、し、軍、法、派、子、を、り、て、教、了、た、老、拙、
拙、終、し、父、を、り、し、し、是、に、人、相、し、し、花、柳、は、似、し、し、
又、是、之、の、派、を、り、し、し、は、是、に、し、し、は、是、に、し、し、
小、を、後、河、の、由、井、の、体、屋、の、子、と、し、し、は、あ、り、し、し、

後東へ出入り一門人の多く主人の眼中にこそしむ
孫小軍字初とて少人小孫をて主付代の内から
大孔明子房の再来の中へ唱あるまこととて若女に
卯の七月は信意のるやあれと改別阿野川のやまふ
東有せまてくそ名を名くまふはつたりまことあり
幽谷將也を付代と名をま武名をあり能ふは若
子のま名のはふれは牛也とありて神田連産所とあり
いほまて是ふるやそすねふ小寛永の中へ連産所小
後若く若女の始ふ枝本町よ持せしふや外よるま
あり

一 奥州白岩より菅原の氏女を父の仇討のるせふ
たてふ傳へて今よ彼名方の考より名をよまきりこの
る太田傳中あるもの人よ仙臺の東へ日記よあや
やと尋られふ後東の若に國降よあると菅原の
氏あやとてまはれられも仙臺の四乳よに若く
まはれありと書られや

一 今村重政の東の菅原中のある証されられ申す
寛永九年仙臺より女見す父の仇討のる城より
さうすれ後東を付の主乃にせしめのとてんせしを
考す菅原中よ書るもの証も虚説よてあるは

- 一 漢史解海 二卷 一 樂考 一卷
- 一 南清志 一卷 一 白石傳稿 二卷
- 一 百家論 拾卷 一 白雅園 一卷
- 一 文邑志 二卷 一 五子畧 三卷
- 一 朝祥御從事 二卷 一 詩經圖 一卷
- 一 視樂江國宗流 一卷 一 國書漫解 一卷
- 一 詩州 一卷 一 新井家系 一卷
- 一 黃白同音 三卷 一 鯉史志 一卷
- 一 古史通 三卷 一 冠服考 一卷

右古史通 成令卷二十卷 出卷外字留三卷 斗齒附不持信

文昭院振印代藩御稿或拾卷 存經圖 於飲上信

右書抄當時不持信

一 藩御稿 或拾卷

右御用身實元政九年十月以百卷上

- 一 五版圖 經邦曲何 方策合編
- 一 史鏡 經院 古史通或同
- 一 帆集 聘事文案 白石草集
- 西洋人物集 活助集解 筆 行
- 新令句解 宣筆集 阿蘭院考
- 圖書正派 西學推問 古纂圖

白石送文 東香漢 寒水解疑

殊方通語錄 仁久送因 文字考

西字考略

右著述一帙之中傳其當時而終不終

一 孫氏兵法擇 三卷

右坊田抄傳後正和室身近實也古中比望

卯
巳月

新井辰郎

送充物類目錄

一 備前老人地卷一冊 一 三河指語 二冊

一 東照官所遺河川四冊 一 同附錄 石卷上卷

一 本伏錄 六冊 一 豊島考若若七冊

一 太田邊澤自記 八冊 一 福徳公則志語記八冊

一 永祿以來出陣勲狀記紀事 一 双溪記

一 幸別三方原合戰記 九冊 一 岡國雜記

一 清原得上下 一 徳并根元記自一至八

一 介石記 自一至八 一 見因集抄出

一 赤出祝 十文 一 同十六同同

一 秋後撥勲根元記上下 一 水野家記

仕有出羽守常濟同惠分得也 城位園易
御傳教汗園也 仰付每以後每月三度元
也 城位於御座間心面三番額汗園位
御能汗見一後每每年三度元也
城汗見仕種汗順均未仕同本青九月
桂昌院様御本丸也 入言也 石也
城位也 御能汗見 仰付
桂昌院様御傳教汗園也 仰付
常憲院様 桂昌院様 咸長園易
道理儀論也 仰付 仰德國漢滿相所

象 上意 後抄院茶大信正隆光之盛具圖
法同儀論也 仰付汗順拍位同本三月十八日
美法守亭也
常憲院様御傳教汗園也 仰傳教汗園也
仰付汗見也 仰付書信錄典傳教也
仰付汗見二茶守或茶丸也汗順仕也以後
美法守亭也
常憲院様 文眼院様 咸長每度
御傳教汗園也 御能汗見 仰付汗見也
仰付傳教汗園也 仰能相勅也

常憲院様識繪之御相子云 御付又家
上志疑問中上之其外也 城跡御座同様論
為度子 御傳教之良一統洋國中我郷人
不巧也 拙子之云云也 上廣之也

御初近為石 御尋之具 御信書上
系 御感為 思后御信書上

御分自御命書載信書之洋順物御紋取
御命書御中志御之西為卷物或或也 城之也

御命洋順物御命書信書上
常憲院様 文昭院様 御感書洋順物

石銘洋記

常憲院様御代志性危学問指南之儀也

御内証御隠密御用等儀文書中御之也

御他界若年近舟相勤之是又逐一不書記

元禄十七年九月十日拾持御留同之辰年

正月十九日新始式百石之儀同十年年十二月八日

記録出年百石加増三百石之儀家永二百年三月

十九日又拾石加増三百石之儀同二年四月廿七日

勅命護法常之儀限出年又拾石加増百石之儀同

九月廿日又拾石加増百石之儀同

正徳四年年十月廿日

常憲院啟贈大相國公清海貞紀出未付直轄
於合又百石石成書後

有德院様御代享保二五年九月十日有由山城
六翰衍義一冊止渡成列息之附
尤其書之首尾小元より少く息之申禮息之
息附首尾之舊息名匠不之朱高止一今度
新息附之新首尾舊息之通書之息附了
中旨之 御付因書之御書物御息之附指一尺
匠之為 思右之付右書物板行下之 御付旨

山城及之信儀身御寄之流之及之言上之

聖之百建 上國好寄之十流之之為

思右之付右御本之抄卷御寄之御上之

御書物御寄板行下 御付旨之若之為之

之為 思右之付右御文之相禮分下

御出之山城及之信儀則右御用向相勤

中之右御用御書物御序文

御好中御寄御序文御七之御年二月廿九日

於 御城御書籍御用之 御付相勤之為

御復員御致御版一重御序文御寄御城及

多信信以文引續清隱密所用
作付以馬兵庫氏宅上每月之度元正親
清隱密所用之月越有程之多少考定量
以之由也西没依程也 作付由是又
信者之良則信是之也依中上之信之相定
小祿之信是之也依及信付日依之右
清隱密所用相動長中上之相動
清隱密所用又大河國心之信 石出方
清隱密所用又大河國心之信 石出方
中上同九辰年二月秋生也七節觀後繪

所用信 作付以是舊刻於子園畫信文
上質信交持也
清隱密所用之信是也 作知右為代親刻
芥子園畫傳所書信之信位唯今以不持信
同十巳年七月八日信余未年章被上之信書拍
鄭書子來我情樂書按園所用也
作付有馬去庫氏中清相動中同十巳年
七月之信川傍宿田中其隅酒向川源夏高
堂建之信自方之碑文之作信付右碑文改出
差是信 上志信水野和泉氏信信信

大畏誠前多戶後剛定住左是是右剛定
 之上奉入 上府公同二年三月十日為
 石堂 城住多戶歌歌過問學同臣財所
 所用向教有相勤以付 仰月見
 仰付有和自水度多後後同年四月十日
 城住納戶持多扇子箱被上正奉者善松平
 玄蕃次披露
 有德院様 惇信院様 仰月見住多
 栗丸上堂 城扇子箱被上住同二年六月
 六日三文中署校公所用多 仰付有馬去庫民

多後相勤中同二年三月八日和劑向方後
 清尋之氏兵庫次多清宋板書物中上
 右外被生為七所觀之公 仰付清用教
 之後名往洋礼以同二年正月十七日太病後
 建 上國御系らニ力元洋頭住仰付飛
 仕同月九日六拾三歳多病死住右養卿時
 获生也右處道後後父養卿時通相續仕同
 元同二年二月十日養生著述之度量考卷之
 五 仰付有大夫為去年之秋获生致七所觀
 且後清同四月十日度量考二本以上住後

又後之著述、於豫奉入 上覽、
仰出、有去波、在、成、
入 上覽、
漢去、
事、
作、
度、
大、
序、
子

考、
樂、
同、
九、
考、

親類書

一 高祖父

秋生少目

三、
中、
省、

中名新三列由緒之... 後、松平新三郎殿
馬車相傳初生之文字以公化大給也

一 曾祖父

秋生為在邊

伊豫國司權中納言具教之原置彼和助
具教公生害之後合撫唐文國國日子辰天正
十七年某月廿二日病死仕也

一 祖父

秋生之玄甫

殿周師道之元澄才子江合之孫在實寬永
十三年五月十日病死仕也

一 父

秋生之方房法眼

常憲院權中納言 具教 伊側殿周師相勤宣永
三年五月九日病死仕也

一 母

見為助之孫娘

伊在左松子相勤中具教將源流流流流傳
父為流罪也 伊付於彼地死去仕也松母也
延享八年二月晦日病死仕也

一 叔父

見為源八郎

伊在左松子相勤中具教將源流流流傳
流罪也 伊付於彼地死去仕也松母也
十三郎手前之孫也

一叙父

父助在島同罪十二年以弟法叙免其今於未
徳記子多前在島

一叙父

父助在島同罪法叙免其今以勝及在島子前在島

一叙父

父助在島上総國板沢村在島
又市

一叙父

父助在島
又市

一同

兵助

右河茂同氏

一叙母

初日十三郎母
川勝友在島妻

一叙母

百此嫁上総國板沢村在島
萩生右行

一兄

醫師上総日本袖村在島
萩生小次郎

一弟

御在丸匠儒者初勤
山角文在島妻

一妹

同大直青杉手在河組
其人

一甥

右同氏
萩生小次郎

一甥

萩生小次郎
其人

- 一 汲冢 山陰國川勝寺之石室
- 一 汲冢 山陰國川勝寺之石室
- 一 汲冢 山陰國川勝寺之石室
- 一 汲冢 山陰國川勝寺之石室
- 一 汲冢 山陰國川勝寺之石室

右外忘掛以親類其正任公以上

正徳元辛卯年

中國三河 獲生慈存



